

【表紙】

【提出書類】	四半期報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の7第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成25年11月14日
【四半期会計期間】	第87期第2四半期（自平成25年7月1日至平成25年9月30日）
【会社名】	株式会社東京放送ホールディングス
【英訳名】	TOKYO BROADCASTING SYSTEM HOLDINGS, INC.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 石原 俊爾
【本店の所在の場所】	東京都港区赤坂五丁目3番6号
【電話番号】	03(3746)1111(代表)
【事務連絡者氏名】	経理部長 伊藤 博信
【最寄りの連絡場所】	東京都港区赤坂五丁目3番6号
【電話番号】	03(3746)1111(代表)
【事務連絡者氏名】	経理部長 伊藤 博信
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

回次	第86期 第2四半期 連結累計期間	第87期 第2四半期 連結累計期間	第86期
会計期間	自平成24年4月1日 至平成24年9月30日	自平成25年4月1日 至平成25年9月30日	自平成24年4月1日 至平成25年3月31日
売上高（百万円）	172,410	171,803	352,351
経常利益（百万円）	5,850	5,664	17,671
四半期（当期）純利益又は四半期 純損失（ ）（百万円）	5,947	2,899	9,173
四半期包括利益又は包括利益 （百万円）	10,844	15,704	24,546
純資産額（百万円）	310,171	369,224	344,473
総資産額（百万円）	530,546	580,726	559,626
1株当たり四半期（当期）純利益金額又は 1株当たり四半期純損失金額（ ）（円）	39.07	18.93	60.27
潜在株式調整後1株当たり四半期（当期） 純利益金額（円）	-	-	-
自己資本比率（%）	55.7	61.0	58.7
営業活動による キャッシュ・フロー（百万円）	14,469	10,985	28,156
投資活動による キャッシュ・フロー（百万円）	14,300	16,947	13,649
財務活動による キャッシュ・フロー（百万円）	3,168	8,699	25,475
現金及び現金同等物の四半期末（期末）残 高（百万円）	75,788	70,842	68,031

回次	第86期 第2四半期 連結会計期間	第87期 第2四半期 連結会計期間
会計期間	自平成24年7月1日 至平成24年9月30日	自平成25年7月1日 至平成25年9月30日
1株当たり四半期純利益金額又は 1株当たり四半期純損失金額（ ）（円）	13.25	0.63

（注）1．当社は四半期連結財務諸表を作成しておりますので、提出会社の主要な経営指標等の推移については記載しておりません。

- 2．売上高には、消費税等は含まれておりません。
- 3．第86期第2四半期連結累計期間の潜在株式調整後1株当たり四半期純利益金額については、1株当たり四半期純損失金額であり、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
- 4．第87期第2四半期連結累計期間の潜在株式調整後1株当たり四半期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
- 5．第86期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2【事業の内容】

当第2四半期連結累計期間において、当社グループ（当社及び当社の関係会社）が営む事業の内容について、重要な変更はありません。また、主要な関係会社における異動もありません。

第2【事業の状況】

1【事業等のリスク】

当第2四半期連結累計期間において、新たな事業等のリスクの発生、または、前事業年度の有価証券報告書に記載した事業等のリスクについての重要な変更はありません。

2【経営上の重要な契約等】

当第2四半期連結会計期間において、経営上の重要な契約等の決定又は締結等はありません。

3【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中の将来に関する事項は、当四半期報告書提出日現在において当社グループ（当社及び連結子会社）が判断したものであります。

(1) 業績の状況

日本銀行の「金融経済月報」によりますと、わが国の景気は緩やかに回復しており、中でも個人消費は、雇用・所得環境に改善の動きがみられ、引き続き底堅く推移しております。企業の業況感も改善を続けており、わが国経済も緩やかな回復を続けていくと思われまます。

当社グループの当第2四半期連結累計期間の売上高は1,718億3百万円（前年同期比0.4%減）、営業利益43億7千6百万円（同10.6%減）、経常利益56億6千4百万円（同3.2%減）、四半期純利益は28億9千9百万円、前期に比べ投資有価証券評価損が大幅に減少したこと等もあり、88億4千6百万円の損益の改善となりました。

<放送事業セグメント>

放送事業セグメントの当第2四半期連結累計期間の売上高は1,047億1千7百万円（前年同期比0.2%増）、営業利益は、6千6百万円（前年同期は12億2百万円の営業損失）となりました。

放送事業収入のうち、株式会社TBSテレビの当第2四半期連結累計期間のタイム収入は435億9百万円（前年同期比3.6%減）となりました。ネットタイムセールスは、「世界陸上モスクワ大会」の放送がありましたが、「ロンドンオリンピック2012」、サッカー「UEFA EURO2012」など大型のスポーツ中継番組が多かった前年実績を上回るまでには至りませんでした。一方、スポット収入は413億1千6百万円（同2.5%増）となりました。4月、5月こそ前年実績を下回りましたが、6月以降回復基調にあり、第2四半期連結累計期間では増収となりました。TBSテレビの在京5局間のスポット売上シェアは前年と変わらず19.6%（推計）でした。

TBSテレビの上期26週の平均視聴率は、全日帯6.3%（前年同期比0.2ポイント減）、ゴールデン帯9.9%（同0.7ポイント増）、プライム帯9.9%（同0.6ポイント増）とゴールデン帯、プライム帯で前年同期を上回りました（ビデオリサーチ調べ 関東地区）。

特筆すべきは、日曜劇場「半沢直樹」が社会現象になるほどの大ヒットとなったことです。放送開始以降、最終回まで一度も視聴率を落とさず、全10話の平均視聴率は28.7%、特に、最終回の平均視聴率は42.2%を記録し、連続ドラマでは、今世紀最高視聴率を塗り替えました。この他、ドラマでは、金曜ドラマ「なるようになるさ。」が平均視聴率で13.0%をとり、堅実な成績でした。レギュラーのバラエティ番組では、「爆報！THEフライデー」「ぴったんこカン・カン」「中居正広の金曜日のスマたちへ」などの視聴率が引き続き好調で、TBSテレビを代表するバラエティ番組としての存在感を示しております。スポーツ中継番組では「世界陸上モスクワ大会」のプライムタイム視聴率平均で13.0%でした。これは前回の韓国・テグ大会、前々回のドイツ・ベルリン大会を上回るものでした。この他、4月の放送では延べ75万人が参加したセカンドスクリーン運動エンタテインメント「リアル脱出ゲームTV」を8月に放送したところ、全国から延べ172万人が参加しました。テレビのリアルタイム視聴を促進し、次世代のメディア接触へのヒントを得られたと考えております。

株式会社BS-TBSは、売上高70億1千万円（前年同期比5.5%増）、営業利益10億5千5百万円（同5.1%減）となりました。タイムセールスが好調だった他、スポットセールス、ショッピングも堅調に売上を伸ばしております。7月から送出設備を更新したことに伴い減価償却費が増加したため、営業利益は減益になりましたが、現在最も成長しているメディアであることに変わりはなく、引き続きグループ各社とのシナジーを最大限まで高めてまいります。

ラジオ部門では、株式会社TBSラジオ&コミュニケーションズが8月のビデオリサーチ首都圏聴取率調査においてもトップを記録し、2001年8月調査以来、12年2ヶ月、73期連続で首都圏ラジオ首位の座を守り続けております。中でも、安住紳一郎出演の「日曜天国」が高い聴取率を獲得したほか、平日午後放送の「たまむすび」は同時帯単独首位となり、TBSラジオは平日朝から夕方までの全てのワイド番組で首位となりました。ハウジング等の関連事業収入の伸びもあり、当第2四半期連結累計期間の売上高は53億9千3百万円（前年同期比3.6%増）、営業利益は1億6千2百万円（同47.4%増）でした。ラジオをとりまく状況は依然厳しいものがありますが、コストコントロールを行い、収益の確保を目指してまいります。

<映像・文化事業セグメント>

映像・文化事業セグメントの当第2四半期連結累計期間の売上高は595億3千万円（前年同期比1.1%減）、営業利益9億7千8百万円（同60.2%減）となりました。

催事・興行では、「アメリカン・ポップ・アート展」が国立新美術館で開催され、9月末現在で13万人を超える方が来場、また、9月6日からは「システィーナ礼拝堂500年祭記念 ミケランジェロ展 - 天才の軌跡」が国立西洋美術館で開催されており、好評を博しています。ステージ関係では、東急シアターオーブでブロードウェイ・ミュージカル「ドリームガールズ」やミュージカル「ロミオ&ジュリエット」、赤坂ACTシアターでは坂東玉三郎主演「アマテラス」が開催され、いずれも好評でした。

映画事業では、昨年テレビドラマで高視聴率を記録した「ATARU」の続編「ATARU～THE FIRST LOVE&THE LAST KILL」が9月に公開され、大ヒット中です。

赤坂サカスでは、「夏サカス2013～笑顔の扉～デリシャカス～番組グルメでおもてなし」と題して、過去最大のテレビ・ラジオ番組と連動した「食」を楽しんでいただくイベントを実施しました。総入場者数も約133万人にのばりました。

メディアビジネスでは、CS事業のTBSチャンネル2が開局1周年になり順調に契約者数を獲得しております。オンデマンド事業では、ドラマ「半沢直樹」の見逃し配信サービスがこれまでの記録を塗りかえるヒットとなりました。海外事業においては、「SASUKE」のフォーマット販売など定番タイトルが引き続き好調でした。また、ベトナムのベトナムテレビジョン（VTV）と共同制作したドラマ「The Partner～愛しき百年の友へ～」は9月に両国で同日放送され、日本とベトナムの国交樹立40周年に花を添えました。

DVD事業では、映画「ATARU」の公開に併せて1月放送の特別篇「ATARUスペシャル」をブルーレイ/DVDで発売したところ大ヒットとなりました。また、かねてから要望がありましたドラマ「魔王」のブルーレイ版も期待通りの売上を達成しました。

ライセンス事業でも、ドラマ「半沢直樹」の関連グッズが記録的な売上を記録しております。中でも、『倍返し饅頭』はTBSストア（東京・赤坂）では開店前から行列ができ、入荷即完売が連日続きました。

<不動産事業セグメント>

不動産事業セグメントの当第2四半期連結累計期間の売上高は75億5千6百万円（前年同期比2.9%減）、営業利益33億3千5百万円（同8.5%減）となりました。

平成20年2月に開業した赤坂サカスですが、各種の興行や「Sacas広場」で開催される様々なイベントを通じて文化・エンタテインメントの発信地としての人気を確立しております。今後もTBSグループや番組をより身近に感じていただくための体験イベントの開催などに加えて、赤坂の街と連動した地域密着イベントにも力を注いでまいります。

(2) 連結財政状態に関する定性的情報

（資産、負債及び純資産の状況）

（資産）

当第2四半期連結会計期間末における資産合計は5,807億2千6百万円で、前連結会計年度末に比べ211億円の増加となりました。受取手形及び売掛金が43億9百万円減少、有形固定資産が減価償却等により19億3千4百万円減少した一方、現金及び預金、有価証券を合わせた手許資金が128億1千5百万円増加、保有する株式の含み益の増加等により投資有価証券が161億9千6百万円増加、子会社株式の追加取得等によりのれんが17億1百万円増加したこと等によります。

（負債）

負債合計は2,115億2百万円で、前連結会計年度末に比べ36億5千万円の減少となりました。保有する株式の時価の上昇に伴い繰延税金負債が68億5百万円増加した一方、支払手形及び買掛金が30億4千5百万円減少、未払金が25億4千9百万円減少したこと等によります。

（純資産）

純資産合計は3,692億2千4百万円で、前連結会計年度末に比べ247億5千1百万円の増加となりました。自己株式の処分等により自己株式が126億5千2百万円減少したことに加え、その他有価証券評価差額金が121億7千1百万円増加したこと等によります。

この結果、自己資本比率は61.0%、1株当たりの純資産は2,185円70銭となっております。

(連結キャッシュ・フロー計算書に関する定性的情報)

当第2四半期連結会計期間末における現金及び現金同等物は708億4千2百万円で、前連結会計年度末に比べて28億1千万円増加しました。各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりです。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動によるキャッシュ・フローは、109億8千5百万円の収入になりました(前年同期は144億6千9百万円の収入)。税金等調整前四半期純利益55億3千2百万円に加え、減価償却費72億2千7百万円、売上債権の減少額43億9百万円等の増加項目が、法人税等の支払額33億5千3百万円、仕入債務の減少額30億4千5百万円等の減少項目を上回ったことによるものです。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動によるキャッシュ・フローは、169億4千7百万円の支出になりました(前年同期は143億円の支出)。有価証券の取得による支出(純額)99億9千4百万円、有形固定資産の取得による支出62億3千7百万円、関係会社株式の取得による支出34億8千3百万円等によるものです。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動によるキャッシュ・フローは、86億9千9百万円の収入になりました(前年同期は31億6千8百万円の支出)。自己株式の処分による収入118億8千3百万円、配当金の支払額16億7千8百万円、長期借入金の返済による支出6億円等によるものです。

(3) 事業上及び財務上の対処すべき課題

当第2四半期連結累計期間において、当社グループが対処すべき課題について重要な変更はありません。

[会社の財務および事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針について]

当社は、平成19年2月28日開催の当社取締役会において、当社の財務および事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針（以下「基本方針」といいます）を整備しましたが、当社グループの新たな中期経営計画「グループ中期経営計画2015」の策定と実行に伴い、平成25年5月10日の同取締役会において、当該中期経営計画に関わる部分について、以下のとおり改定を行いました。

(1) 基本方針の内容

当社は、上場企業として市場経済の発展に寄与すべき責務を負うと同時に、有限希少の電波を預かる放送事業者を傘下に持つ認定放送持株会社として、高い公共的使命を与えられている企業であります。その企業としての性格は、当社が制定した「TBSグループ行動憲章」の「行動憲章」に、「私たちは、表現の自由を貫き、社会・文化に貢献する公平・公正・正確な情報の発信に努め、報道機関としての使命を果たします。」、「私たちは、社会とのつながりや自然との共生を大切に考え、あらゆる事業分野や個人活動を通じて、積極的な社会貢献とよりよい地球環境の実現に努めます。」と掲げているとおりであり、とりわけ災害・緊急時等には、わが国の基幹メディアとして、一瞬の遅滞も許されることなく社会のライフラインの機能を果たすべき放送事業者を傘下に持つ認定放送持株会社として、社会的に重大な役割を与えられております。

また、地上デジタル放送の本格化や多メディア時代を迎えて、放送事業は、番組制作・企画開発力とその質の一層の向上を問われております。

これらの社会的使命、社会的役割を実現し、放送事業としての競争力の鍵である番組制作・企画開発力とその質を絶えず向上させていくうえで、従業員や関係職員等当社並びに当社の子会社および関連会社が有する人材が重要な経営資源として位置づけられるのは勿論のこと、業務委託先や取引先その他当社の番組やコンテンツを支える人々との長期の信頼関係も、経営資源として極めて重要な役割を果たしており、これらは当社の企業価値の源泉を構成するものにほかなりません。

したがって、当社の企業価値および株主の皆様共同の利益を最大化していくためには、中長期的な観点から、このような当社の企業価値を生み出す源泉を育て、強化していくことが最も重要であって、当社の財務および事業の方針は、このような認識を基礎として決定される必要があります。

もとより、当社は、上場企業として、当社の企業価値および株主の皆様共同の利益の最大化に資する形で当社株式の大量取得行為が行われることや当該行為に向けた提案がなされることを否定するものではありません。しかしながら、当社の財務および事業の方針の決定を支配する者が、上記のような当社の企業価値の源泉とその中長期的な強化の必要性についての認識を共有せず、上述した当社の企業価値を生み出す源泉を中長期的に見て毀損するおそれがある場合、当社の企業価値および株主の皆様共同の利益の最大化に反する結果につながりかねないものと考えられます。

以上のような観点から、当社といたしましては、放送法および電波法の趣旨にも鑑み、特定の者またはグループ（およびこれらと所定の関係を有する者）が当社の総株主の議決権の20%以上に相当する議決権を有する株式を取得すること等により（かかる場合における特定の者またはグループおよびこれらと所定の関係を有する者を併せて以下「買収者等」といいます）、上述したような当社の企業価値の源泉が中長期的に見て毀損されるおそれがある場合など、当社の企業価値または株主の皆様共同の利益の最大化が阻害されるおそれが存する場合には、かかる買収者等は当社の財務および事業の方針の決定を支配する者として不適切であるとして、法令および当社の定款によって許容される限度において、場合により、当社の企業価値および株主の皆様共同の利益の確保およびその最大化に向けた相当な措置を講じることとしています。

なお、認定放送持株会社制度は、放送事業者にも持株会社制度の利用を認めることにより、マスメディア集中排除原則の趣旨を維持しつつ、放送事業者の経営のより一層の効率化を可能にする新たな経営基盤を提供するものですが、放送の多元性・多様性および地域性を確保する趣旨から、法律上議決権比率が33%を超える株主に関しては当該超過分の議決権の保有が制限されており、当社の株主の皆様につきましても、当社が認定放送持株会社に移行いたしました結果、かかる制限が既に適用されております。

しかしながら、当社は、認定放送持株会社への移行後も、従前同様、放送の不偏不党を堅持しながら、分野に応じて最適な業務提携先と最適な提携を実現し、全体として多彩な業務提携先との間で全方位の関係を構築する、いわゆる全方位型業務提携を提携方針としておりますところ、この観点からは、持株比率が20%を超える株主が出現することは、これにより上記提携方針を維持した場合を上回る利益が見込まれる場合でない限り、依然として当社の企業価値、株主の皆様共同の利益にとって好ましくない事態であると考えられます。かかる趣旨から、当社といたしましては、認定放送持株会社への移行による議決権保有制限制度の適用に拘わらず、今後も、基本方針に照らして不適切な者によって当該株式会社の財務および事業の方針の決定が支配されることを防止す

るための取組みを維持することとし、また、当社グループの新たな中期経営計画として、平成25年5月10日に「グループ中期経営計画2015」を策定いたしました。

(2) 「グループ中期経営計画2015」の実行による企業価値向上および株主共同の利益最大化に向けた取組み

当社グループは、今後とも、テレビ・ラジオの放送を通じて国民の知る権利に奉仕し、広く愛される良質な娯楽を提供していく所存です。その一方、デジタル・コンテンツ・ビジネスのリーディングカンパニーとしてさらなる飛躍を目指すため、当社グループの中期経営計画「V!up」プランを策定して、2006(平成18)年度よりその遂行に取り組み、2014(平成26)年度に至る上記中期経営計画を「グループ経営計画2014」として改定して遂行してまいりましたが、この度、デジタルデバイスの発展・進化や、経済環境の変化を受けて、新たに「グループ中期経営計画2015」を策定しました。

当社グループは、「グループ中期経営計画2015」の遂行を通じて、「最強のコンテンツ・ソフト」を発信する「最良のメディア・グループ」としての地位を確立し、もって当社および当社グループの企業価値と株主の皆様共同の利益の最大化を目指すとともに、株主の皆様の負託に応えてまいります所存です。

(3) 基本方針に照らして不適切な者による支配を防止するための取組みの概要

当社は、平成19年2月28日開催の当社取締役会の決議により、当社の企業価値および株主の皆様の共同の利益を確保し、向上させることを目的として、平成17年5月18日付けで公表いたしました「当社株式にかかる買収提案への対応方針」(以下「17年プラン」といいます)について、その実質を維持しつつ株主の皆様の意思を更に重視する形で改定(以下、改定後の対応方針を「本プラン」といいます)を行い、平成19年6月28日開催の当社第80期定時株主総会(以下「平成19年総会決議」といいます)において、本プランとその継続につき、同総会に出席した議決権を行使することができる株主の議決権の過半数によるご賛同をもって株主の皆様のご承認をいただいております。本プランにつきましては、その後、当社が平成21年4月1日付けで認定放送持株会社に移行したこと、さらには会社法および金融商品取引法の改正および施行等の法的環境の変化を踏まえ、当社企業価値評価特別委員会(以下「特別委員会」といいます)の現任委員全員の同意を得て、平成19年総会決議の枠内で、本プランについて所要の最小限の範囲で一部修正を行っております。現行の本プランの内容は以下のとおりです。

1. 本プランの概要

(a) 本プランの発動にかかる手続

(i) 本プランの手続の対象となる行為

当社は、以下の ないし のいずれかに該当する行為(以下「大規模買付行為等」といいます)が行われた場合を本プランの適用対象とし、これらの行為を行う方針を有する者(当該方針を有するものと当社取締役会が特別委員会の勧告にもとづき合理的に判断した者を含み、当社取締役会が予め承認をした場合を除きます)が現れた場合に、本プランに定めた手続を開始するものといたします。

大規模買付行為等に対する対応措置の内容は、下記()のとおりですが、本プランは、上記の方針を有する者が現れた場合に当然にかかる対応措置を発動するものではなく、当該者に対してかかる対応措置を発動するかどうかは、あくまで下記()、()および()ないし()の手続に従って決せられることとなります。

当社が発行者である株券等についての、買付け等の後における公開買付者グループの株券等所有割合の合計が20%以上となることを目的とする公開買付け

当社が発行者である株券等についての、大規模買付者グループの、買付け等の後における株券等保有割合が20%以上となるような買付け等

当社が発行者である株券等についての公開買付けまたは買付け等の実施にかかわらず、大規模買付者グループと、当該大規模買付者グループとの当社の株券等にかかる株券等保有割合の合計が20%以上となるような当社の他の株主との間で、当該他の株主が当該大規模買付者グループに属するいずれかの者の共同保有者に該当するに至るような合意その他の行為、または当該大規模買付者グループの中核を成す当社の株主と当該他の株主との間にその一方が他方を実質的に支配しもしくはそれらの者が共同ないし協調して行動する関係を樹立する行為

以下、公開買付者グループおよび大規模買付者グループと、上記 において定める「他の株主」とを併せて、「買収者グループ」といいます。

() 買収者グループに対する情報提供の要求等

大規模買付行為等を行う買収者グループは、当社取締役会が別途認めた場合を除いて、当該大規模買付行為等の開始または実行に先立ち、当社に対して、下記の各号に定める情報（以下「本必要情報」といいます）とそれらに加えて、取締役会評価期間（下記（ ）に定義されます）および当該期間における検討の結果下記（ ）に従い当社取締役会が株主総会の招集を決議した場合にはそのときからさらに21日間の待機期間において当社株券等の買付け等を行わないこと、並びに本プランに定める手続を遵守する旨の誓約文言等を記載した書面（以下、本必要情報と併せて「買付意向説明書」といいます）を提出していただきます。

特別委員会は、提出された情報が本必要情報として不十分であると判断した場合には、同グループに対し、適宜回答期限（原則として60日といたします）を定め、追加的に情報を提供するよう求めることがあります。

買収者グループの概要

大規模買付行為等の目的、方法および内容

大規模買付行為等を行うに際しての第三者との間における意思連絡の有無並びに意思連絡が存在する場合にはその相手方名およびその概要、並びに当該意思連絡の具体的な態様および内容

大規模買付行為等にかかる買付けの対価の算定根拠およびその算定経緯

大規模買付行為等にかかる買付けのための資金の裏付け

大規模買付行為等の完了後に意図されている当社および当社グループの経営方針、事業計画、財務計画、資金計画、投資計画、資本政策、配当政策および番組編成方針等その他大規模買付行為等の完了後における当社および当社グループの役員、従業員、取引先、顧客、業務提携先その他の当社および当社グループにかかる利害関係者の処遇方針

反社会的勢力ないしテロ関連組織との関連性の有無およびこれらに対する対処方針

当社の認定放送持株会社としての、およびTBSテレビの放送事業者としての公共的使命に対する考え方
その他当社取締役会または特別委員会が合理的に必要と判断する情報

() 取締役会および特別委員会による検討等

当社取締役会および特別委員会は、買収者グループが開示した大規模買付行為等の内容に応じた下記 または の期間を、当社取締役会による評価、検討、意見形成、代替案立案および買収者グループとの交渉のための期間（以下「取締役会評価期間」といいます）として設定いたします。

対価を現金のみとする公開買付けによる当社の全ての株券等の買付けが行われる場合：60日間

上記 を除く大規模買付行為等が行われる場合：90日間

当社取締役会は、取締役会評価期間内において、買収者グループから提供された本必要情報にもとづき、当社の企業価値および株主の皆様共同の利益の最大化の観点から、買収者グループの大規模買付行為等に関する提案等の評価、検討、意見形成、代替案立案および買収者グループとの交渉を行うものいたします。

また、特別委員会も上記と並行して買収者グループからの提案等の評価および検討等を行います。特別委員会がかかる評価および検討等を行うに当たっては、必要に応じて、当社取締役会から独立した第三者的立場にある専門家の助言を得ることができるものといたします。なお、かかる費用は当社が負担するものといたします。

また、特別委員会は、買収者グループが本プランに定められた手続に従うことなく大規模買付行為等を開始したものと認める場合には、引き続き本必要情報の提出を求めて同グループと協議・交渉等を行うべき特段の事情がある場合を除き、当社取締役会に対して、本新株予約権の無償割当て等の下記（ ）で定める所要の対応措置を発動することを勧告できるものといたします。この場合、当社取締役会は、取締役としての善管注意義務に明らかに反する特段の事情がない限り、特別委員会の上記勧告を最大限尊重のうえ、本新株予約権の無償割当て等の下記（ ）で定める所要の対応措置を発動することといたします。

() 対応措置の具体的内容

当社が本プランにもとづき発動する大規模買付行為等に対する対応措置は、原則として、本新株予約権の無償割当てによるものといたします。但し、会社法その他の法令および当社の定款上認められるその他の対応措置を発動することが適切と判断された場合には当該その他の対応措置が用いられることもあるものといたします。

大規模買付行為等に対する対応措置として本新株予約権の無償割当てをする場合の概要は、下記「3. 本新株予約権の無償割当ての概要」に記載のとおりですが、実際に本新株予約権の無償割当てをする場合には、

(i) 例外事由該当者（下記「3. 本新株予約権の無償割当ての概要」の(c)において定義されます）による権利行使は認められないとの条件や、

() 新株予約権者が例外事由該当者に当たるか否かにより異なる対価で当社がその本新株予約権を取得できる旨を定めた取得条項(例外事由該当者以外の新株予約権者が保有する本新株予約権については、これを当社がその普通株式と引換えに取得する一方、例外事由該当者に該当する新株予約権者が保有する本新株予約権については、当社が適当と認める場合には、これを本新株予約権に代わる新たな新株予約権その他の財産と引換えに取得することができる旨を定めた条項)、または

() 当社が本新株予約権の一部を取得することとするとともに、例外事由該当者以外の新株予約権者が所有する本新株予約権のみを取得することができる旨を定めた取得条項

など、大規模買付行為等に対する対応措置としての効果を勘案した行使期間、行使条件、取得条項等を設けることがあります。

() 対応措置の不発動の勧告

特別委員会は、買収者グループによる大規模買付行為等ないしその提案内容の検討と、同グループとの協議・交渉等の結果、同委員会の現任委員の全員一致によって、当社が定めるガイドラインに照らし、買収者グループが総体として濫用的買収者に該当しないと判断した場合には、取締役会評価期間の終了の有無を問わず、当社取締役会に対して、本新株予約権の無償割当て等の対応措置を発動すべきでない旨の勧告を行います。

本新株予約権の無償割当てその他の対応措置について、特別委員会から不発動の勧告がなされた場合には、当社取締役会は、取締役としての善管注意義務に明らかに反する特段の事情がない限り、当該勧告に従って、本新株予約権の無償割当てその他の対応措置を発動しない旨の決議を行うものいたします。

() 株主総会の開催

特別委員会は、買収者グループによる大規模買付行為等ないしその提案の内容の検討、同グループとの協議・交渉等の結果、同委員会がその現任委員の全員一致により上記()の勧告を行うべき旨の判断に至らなかった場合には、本新株予約権の無償割当ての実施およびその取得条項の発動その他の対応措置の発動につき株主総会に諮るべきである旨を当社取締役会に勧告するものいたします。その場合、当社取締役会は、本新株予約権の無償割当てを行うことおよびその取得条項の発動その他の対応措置の発動についての承認を議案とする株主総会の招集手続を速やかに実施するものいたします。

当該株主総会の決議は、出席した議決権を行使することができる株主の議決権の過半数によって決するものいたします。当該株主総会の結果は、その決議後速やかに開示するものいたします。

() 取締役会の決議

当社取締役会は、取締役としての善管注意義務に明らかに反する特段の事情がない限り特別委員会の勧告(上記()にもとづく対応措置発動の勧告または上記()にもとづく対応措置不発動の勧告)を最大限尊重し、または上記株主総会の決議に従って、本新株予約権の無償割当ておよびその取得条項の発動その他の対応措置の発動または不発動に関する会社法上の機関としての決議を本プラン所定の手続に従って遅滞なく行うものいたします。

なお、買収者グループは、当社取締役会が本プラン所定の手続に従って本新株予約権の無償割当てその他の対応措置を発動しない旨の決議を行った後でなければ、大規模買付行為等を実行してはならないものとさせていただきます。

(b) 本プランの有効期間、廃止および変更

本プランは、平成28年4月以降最初に開催される定時株主総会において本プランを廃止する旨の決議がなされない限り、更に3年間自動的に更新されるものとし、その後も同様とされているものであります。

但し、本プランは、有効期間内であっても当社取締役会もしくは当社株主総会において本プランを廃止する旨の決議がなされた場合または特別委員会が全員一致で本プランを廃止する旨決議した場合には、本プランはその時点で廃止されるものいたします。

また、当社取締役会は、有効期間の満了前であっても、特別委員会の現任委員の過半数かつ外部有識者委員の過半数の同意による承認を得たうえで、本プランを株主総会の承認の範囲内で修正または変更する場合があります。

2. 企業価値評価特別委員会の概要

特別委員会は、本プランにもとづき当社取締役会から諮問を受けた事項およびその他につき当社の企業価値最大化を実現する方策としての適性を検討し、その結果を勧告する当社取締役会の社外諮問機関であります。一方、当社取締役会は、特別委員会の勧告を最大限尊重のうえ、対応方針にもとづく事前対応および対応措置に関し必要となる事項についての最終判断を行うこととしております。また、当社監査役会は、当社取締役会および特別委員会の判断過程を監督することとしております。

特別委員会は、当社またはTBSテレビ社外取締役のうちから1ないし2名、社外監査役のうちから1ないし2名、および弁護士・会計士・投資銀行業務経験者・経営者としての実績や会社法に通じた学識経験者等社

外の有識者から3ないし4名をもって構成することとしており、各委員の任期は2年です。

3. 本新株予約権の無償割当ての概要

(a) 割当対象株主

取締役会で定める基準日(上記「1. 本プランの概要」(a)(i)柱書所定の事由発生後の日とされます)における最終の株主名簿に記載または記録された株主に対し、その所有株式(但し、当社の有する当社普通株式を除きます)1株につき1個の割合で新株予約権の無償割当てをします。

(b) 新株予約権の目的である株式の種類および数

新株予約権の目的である株式の種類は当社普通株式とし、新株予約権の行使により交付される当社普通株式は1株以内で取締役会が定める数とします。

(c) 新株予約権の行使条件

新株予約権の行使条件は取締役会において定めるものとします(なお、買収者グループに属する者であって取締役会が所定の手続に従って定めた者(以下「例外事由該当者」といいます)による権利行使は認められないとの行使条件を付すこともあり得ます)。

(d) 当社による新株予約権の取得

() 当社は、取締役会において定める一定の事由が生じることまたは一定の日が到来することのいずれかを条件として、新株予約権の全部または例外事由該当者以外の新株予約権者が所有する新株予約権のみを取得することができる旨の取得条項を取締役会決議により付すことがあり得ます。

() 前項の取得条項を付す場合には、例外事由該当者以外の新株予約権者が所有する新株予約権を取得するときは、これと引換えに、当該新株予約権者に対して当該新株予約権1個につき1株以内で取締役会が予め定める数の当社普通株式を交付するものとします。他方、例外事由該当者に当たる新株予約権者が所有する新株予約権を取得するときは、これと引換えに、当該新株予約権者に対して当該新株予約権1個につき当該新株予約権に代わる新たな新株予約権またはその他の財産を交付するものとすることがあり得ます。

() 上記()の取得条項にもとづく新株予約権の取得により、例外事由該当者に当たらない外国人等が当社の議決権の割合の20%以上を保有することとなる場合には、当該外国人等に取得の対価として付与される当社普通株式のうち、当社の議決権の割合の20%以上に相当するものについては、株式に代えて上記新株予約権1個につき当該新株予約権に代わる新たな新株予約権またはその他の財産を、それぞれの外国人等の持株割合に按分比例して交付するものとします。

(4) 上記取組みに対する当社取締役会の判断およびその理由

本プランは、当社企業価値および株主の皆様共同の利益を確保し、向上させることを目的として、平成17年5月18日開催の当社取締役会で決定した「当社株式にかかる買収提案への対応方針」につき、平成19年2月28日開催の当社取締役会において、基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務および事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組みとして新たに位置付けるとともに内容の一部改定を行い、平成19年6月28日開催の当社第80期定時株主総会において株主の皆様のご承認をいただいているものであり、平成21年4月3日開催の当社取締役会の決議により行った所要の最小限の範囲での一部修正も、平成19年総会決議の枠内にとどまるものですので、基本方針に沿うものと判断しております。

なお、本プランは、会社法をはじめとする企業法制、経済産業省および法務省が平成17年5月27日に発表した「企業価値・株主共同の利益の確保または向上のための買収防衛策に関する指針」、並びに東京証券取引所が平成18年3月7日に発表した「買収防衛策の導入に係る上場制度の整備等に伴う株券上場審査基準等の一部改正について」および同取引所の諸規則等に則り、株主の皆様のご権利内容やその行使、当社株式が上場されている市場への影響等について十分な検討を重ねて整備したものであり、対応措置の発動に際しては、原則として株主総会を開催し株主の皆様のご意思を確認するものであること、判断の公正性・客観性を担保するため、当社取締役会の諮問機関として、独立性の高い社外取締役および社外監査役並びに社外有識者からなる特別委員会を設置し、対応措置の発動または不発動等の判断に際してはその勧告を得たうえでこれを最大限尊重すべきこととされているものであること、本プランが1回の株主総会決議を通じて廃止可能となるよう手当てされていることなどから、企業価値および株主の皆様共同の利益を損なうものではなく、かつ、当社役員の地位の維持を目的とするものではないものと判断しております。

(4) 研究開発活動

当第2四半期連結累計期間における当社グループ全体の研究開発活動の金額は1億5千5百万円です。

なお、当第2四半期連結累計期間において、当社グループの研究開発活動の状況に重要な変更はありません。

(5) 資本の財源及び資金の流動性についての分析

当第2四半期連結会計期間末における当社グループの有利子負債は、社債500億円、長期借入金566億円（1年内返済予定分含む）を合わせ1,066億円（リース債務除く）となっております。

また、連結子会社㈱スタイリングライフ・ホールディングスは、運転資金の機動的な確保を目的として、当第2四半期連結会計期間末において、複数の金融機関との間で合計45億円のコミットメントライン契約を締結しております（借入実行残高なし、借入未実行残高45億円）。この他、資金の効率化を図るため、売掛債権の一部流動化を実施しております。

第3【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	400,000,000
計	400,000,000

【発行済株式】

種類	第2四半期会計期間末現在 発行数(株) (平成25年9月30日)	提出日現在発行数(株) (平成25年11月14日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	190,434,968	190,434,968	東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数 100株
計	190,434,968	190,434,968	-	-

(2)【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (千株)	発行済株式総 数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金増 減額 (百万円)	資本準備金残 高(百万円)
平成25年7月1日～ 平成25年9月30日	-	190,434	-	54,986	-	55,026

(6) 【大株主の状況】

平成25年9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式総数 に対する所有株式 数の割合(%)
日本マスタートラスト信託銀行株式会社	東京都港区浜松町2丁目11-3	18,567	9.74
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社	東京都中央区晴海1丁目8-11	9,768	5.12
三井物産株式会社 (常任代理人 資産管理サービス信託銀行株式会社)	東京都千代田区大手町1丁目2-1 (東京都中央区晴海1丁目8-12)	7,691	4.03
株式会社毎日放送	大阪府大阪市北区茶屋町17-1	6,576	3.45
株式会社三井住友銀行	東京都千代田区丸の内1丁目1-2	5,745	3.01
三井不動産株式会社	東京都中央区日本橋室町2丁目1-1	5,713	3.00
株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ	東京都千代田区永田町2丁目11-1	5,713	3.00
日本生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内1丁目6-6	5,647	2.96
株式会社ビックカメラ	東京都豊島区高田3丁目23-23	4,190	2.20
株式会社講談社	東京都文京区音羽2丁目12-21	3,771	1.98
計	-	73,382	38.53

(注) 1. 当社は、自己株式を28,031,866株保有しておりますが、上記大株主の状況からは除外しております。

2. 上記銀行の所有株式数のうち、信託業務に係る株式を以下のとおり含んでおります。

日本マスタートラスト信託銀行株式会社 18,567千株

日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社 9,768千株

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

平成25年9月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 28,031,800	-	-
	(相互保有株式) 普通株式 1,009,800	(注) 1,000	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 161,299,100	1,612,991	-
単元未満株式	普通株式 94,268	-	-
発行済株式総数	190,434,968	-	-
総株主の議決権	-	1,613,991	-

(注) 議決権を含めた株式の貸与取引により、議決権1,000個が発生しております。

【自己株式等】

平成25年9月30日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数(株)	他人名義所有 株式数(株)	所有株式数の 合計(株)	発行済株式総数 に対する所有株 株式数の割合 (%)
(自己保有株式) 株式会社東京放送ホール ディングス	東京都港区赤坂 5丁目3-6	28,031,800	-	28,031,800	14.71
(相互保有株式) 株式会社東通	東京都港区赤坂 2丁目14-5	894,000	(注) 100,000	994,000	0.52
株式会社テレパック	東京都港区赤坂 2丁目12-10	15,800	-	15,800	0.00
計	-	28,941,600	100,000	29,041,600	15.25

(注) 株式会社東通の他人名義所有株式100,000株は、野村證券株式会社(東京都中央区日本橋1丁目9-1)への議決権を含めた株式の貸与取引によるものであります。

2【役員の状況】

該当事項はありません。

第4【経理の状況】

1．四半期連結財務諸表の作成方法について

当社の四半期連結財務諸表は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（平成19年内閣府令第64号）に基づいて作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第2四半期連結会計期間（平成25年7月1日から平成25年9月30日まで）及び第2四半期連結累計期間（平成25年4月1日から平成25年9月30日まで）に係る四半期連結財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人による四半期レビューを受けております。

1【四半期連結財務諸表】

(1)【四半期連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成25年3月31日)	当第2四半期連結会計期間 (平成25年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	68,243	20,059
受取手形及び売掛金	37,568	33,259
有価証券	-	60,999
商品及び製品	7,174	7,273
番組及び仕掛品	8,149	7,822
原材料及び貯蔵品	581	605
前払費用	6,477	5,031
繰延税金資産	5,044	4,422
その他	6,030	5,270
貸倒引当金	139	149
流動資産合計	139,130	144,594
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	192,312	194,422
減価償却累計額	85,098	87,831
建物及び構築物(純額)	107,213	106,590
機械装置及び運搬具	83,518	86,434
減価償却累計額	74,992	75,414
機械装置及び運搬具(純額)	8,526	11,019
工具、器具及び備品	24,116	25,817
減価償却累計額	21,965	22,898
工具、器具及び備品(純額)	2,150	2,918
土地	84,554	84,490
リース資産	6,625	6,357
減価償却累計額	3,787	3,781
リース資産(純額)	2,837	2,575
建設仮勘定	6,748	2,500
有形固定資産合計	212,030	210,095
無形固定資産		
ソフトウェア	4,768	4,694
のれん	¹ 22,360	¹ 24,062
リース資産	347	314
その他	1,702	1,731
無形固定資産合計	29,178	30,801
投資その他の資産		
投資有価証券	164,463	180,659
長期貸付金	283	269
繰延税金資産	1,706	1,659
長期前払費用	949	798
その他	12,613	12,572
貸倒引当金	728	724
投資その他の資産合計	179,286	195,233
固定資産合計	420,496	436,131

資産合計

559,626

580,726

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成25年3月31日)	当第2四半期連結会計期間 (平成25年9月30日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	34,814	31,768
1年内返済予定の長期借入金	31,200	31,200
未払金	11,431	8,882
未払法人税等	3,982	2,234
未払消費税等	684	370
未払費用	5,761	5,486
役員賞与引当金	191	80
送信所移転対策引当金	1,080	486
その他の引当金	1,134	972
その他	5,809	4,770
流動負債合計	96,090	86,253
固定負債		
社債	50,000	50,000
長期借入金	26,000	25,400
退職給付引当金	13,431	14,308
リース債務	1,590	1,358
繰延税金負債	12,681	19,487
その他	15,358	14,693
固定負債合計	119,062	125,248
負債合計	215,152	211,502
純資産の部		
株主資本		
資本金	54,986	54,986
資本剰余金	60,254	59,512
利益剰余金	228,882	230,102
自己株式	48,973	36,321
株主資本合計	295,150	308,280
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	33,468	45,639
繰延ヘッジ損益	46	111
為替換算調整勘定	106	71
その他の包括利益累計額合計	33,314	45,680
少数株主持分	16,008	15,263
純資産合計	344,473	369,224
負債純資産合計	559,626	580,726

(2) 【四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】

【四半期連結損益計算書】

【第2四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)
売上高	172,410	171,803
売上原価	123,351	121,141
売上総利益	49,058	50,662
販売費及び一般管理費	44,161	46,286
営業利益	4,897	4,376
営業外収益		
受取利息	36	27
受取配当金	1,636	1,736
持分法による投資利益	13	139
その他	442	451
営業外収益合計	2,129	2,354
営業外費用		
支払利息	664	567
固定資産除却損	46	98
その他	465	399
営業外費用合計	1,176	1,066
経常利益	5,850	5,664
特別利益		
投資有価証券売却益	1	1,026
固定資産売却益	-	41
関係会社株式売却益	-	6
特別利益合計	1	1,074
特別損失		
送信所移転対策損失	-	1,100
投資有価証券評価損	8,770	63
減損損失	534	42
退職給付制度改定損	67	-
特別損失合計	9,372	1,206
税金等調整前四半期純利益又は税金等調整前四半期 純損失()	3,520	5,532
法人税、住民税及び事業税	1,223	1,633
法人税等調整額	551	584
法人税等合計	1,775	2,217
少数株主損益調整前四半期純利益又は少数株主損益 調整前四半期純損失()	5,295	3,314
少数株主利益	651	415
四半期純利益又は四半期純損失()	5,947	2,899

【四半期連結包括利益計算書】
【第2四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)
少数株主損益調整前四半期純利益又は少数株主損益 調整前四半期純損失()	5,295	3,314
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	5,727	12,172
繰延ヘッジ損益	206	168
為替換算調整勘定	28	48
持分法適用会社に対する持分相当額	0	0
その他の包括利益合計	5,549	12,389
四半期包括利益	10,844	15,704
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	11,480	15,264
少数株主に係る四半期包括利益	635	439

(3)【四半期連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前四半期純利益又は税金等調整前四半期純損失()	3,520	5,532
減価償却費	6,772	7,227
長期前払費用償却額	122	133
減損損失	534	42
のれん償却額	802	802
投資有価証券評価損益(は益)	8,770	63
退職給付費用	199	876
固定資産除却損	46	98
送信所移転対策引当金の増減額(は減少)	-	593
貸倒引当金の増減額(は減少)	127	5
受取利息及び受取配当金	1,673	1,763
支払利息	664	567
持分法による投資損益(は益)	13	139
投資有価証券売却損益(は益)	1	1,026
売上債権の増減額(は増加)	5,167	4,309
たな卸資産の増減額(は増加)	2,026	204
前払費用の増減額(は増加)	2,624	1,477
仕入債務の増減額(は減少)	2,055	3,045
その他	948	1,951
小計	15,338	12,823
利息及び配当金の受取額	1,670	1,769
利息の支払額	637	566
法人税等の還付額	472	312
法人税等の支払額	2,375	3,353
営業活動によるキャッシュ・フロー	14,469	10,985
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の純増減額(は増加)	7,995	9,994
有形固定資産の取得による支出	5,212	6,237
無形固定資産の取得による支出	513	1,018
投資有価証券の取得による支出	49	75
投資有価証券の売却による収入	1	4,032
関係会社株式の取得による支出	-	3,483
その他	532	171
投資活動によるキャッシュ・フロー	14,300	16,947

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入れによる収入	10,800	-
長期借入金の返済による支出	11,750	600
自己株式の処分による収入	-	11,883
配当金の支払額	1,524	1,678
少数株主への配当金の支払額	53	285
その他	640	621
財務活動によるキャッシュ・フロー	3,168	8,699
現金及び現金同等物に係る換算差額	14	73
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	3,013	2,810
現金及び現金同等物の期首残高	78,801	68,031
現金及び現金同等物の四半期末残高	75,788	70,842

【注記事項】

（連結の範囲又は持分法適用の範囲の変更）

該当事項はありません。

（会計方針の変更等）

該当事項はありません。

（四半期連結財務諸表の作成にあたり適用した特有の会計処理）

該当事項はありません。

（四半期連結貸借対照表関係）

1. 固定負債である負ののれんと相殺した差額を記載しております。

なお、相殺前の金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成25年3月31日)	当第2四半期連結会計期間 (平成25年9月30日)
のれん	23,215百万円	24,884百万円
負ののれん	855	822

2. 偶発債務

保証債務

	前連結会計年度 (平成25年3月31日)	当第2四半期連結会計期間 (平成25年9月30日)
従業員の住宅ローン	3,578百万円	従業員の住宅ローン 3,155百万円
(株)中国放送のリース契約に対する 連帯保証	150	(株)中国放送のリース契約に対する 連帯保証 83
(株)あいテレビのリース契約に対す る連帯保証	131	(株)あいテレビのリース契約に対す る連帯保証 73
計	3,859	計 3,312

(四半期連結損益計算書関係)

販売費及び一般管理費の主な内容

	前第2四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)
人件費	10,705百万円	10,931百万円
代理店手数料	16,268	16,584
広告宣伝費	3,556	3,793
業務委託費	1,681	1,660
退職給付費用	557	1,117
減価償却費	904	903
役員賞与引当金繰入額	94	79

(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の四半期末残高と四半期連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前第2四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)
現金及び預金勘定	26,980百万円	20,059百万円
有価証券勘定	50,000	51,000
預入期間が3か月を超える定期預金	1,192	217
現金及び現金同等物	75,788	70,842

(株主資本等関係)

前第2四半期連結累計期間(自平成24年4月1日至平成24年9月30日)

配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成24年6月28日 定時株主総会	普通株式	1,526	10	平成24年3月31日	平成24年6月29日	利益剰余金

(2) 基準日が当第2四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第2四半期連結会計期間末後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成24年11月1日 取締役会	普通株式	1,068	7	平成24年9月30日	平成24年12月7日	利益剰余金

当第2四半期連結累計期間(自平成25年4月1日至平成25年9月30日)

1. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成25年6月27日 定時株主総会	普通株式	1,678	11	平成25年3月31日	平成25年6月28日	利益剰余金

(2) 基準日が当第2四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第2四半期連結会計期間末後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成25年11月7日 取締役会	普通株式	1,299	8	平成25年9月30日	平成25年12月6日	利益剰余金

2. 株主資本の金額の著しい変動

当社は、平成25年8月29日開催の取締役会決議に基づき、(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ、三井物産(株)、(株)毎日放送及び(株)WOWOWとの間で、各社との業務上の関係強化のための資本業務提携契約を締結するとともに、平成25年9月13日付で、各社を割当先とする第三者割当による自己株式9,772,200株の処分を実施しました。

この結果、当第2四半期連結累計期間において、単元未満株式の買取等による増加と合わせ、自己株式が126億5千2百万円、9,735,963株減少しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前第2四半期連結累計期間(自平成24年4月1日至平成24年9月30日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	報告セグメント				調整額 (注1)	四半期連結損 益計算書計上 額 (注2)
	放送	映像・文化	不動産	計		
売上高						
外部顧客への売上高	104,461	60,167	7,781	172,410	-	172,410
セグメント間の内部売上高 又は振替高	783	2,216	3,327	6,327	6,327	-
計	105,245	62,384	11,108	178,738	6,327	172,410
セグメント利益又は損失()	1,202	2,459	3,643	4,901	3	4,897

(注) 1. セグメント間取引消去であります。

2. セグメント利益は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

2. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

該当事項はありません。

当第2四半期連結累計期間(自平成25年4月1日至平成25年9月30日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	報告セグメント				調整額 (注1)	四半期連結損 益計算書計上 額 (注2)
	放送	映像・文化	不動産	計		
売上高						
外部顧客への売上高	104,717	59,530	7,556	171,803	-	171,803
セグメント間の内部売上高 又は振替高	873	1,964	2,789	5,627	5,627	-
計	105,590	61,495	10,345	177,431	5,627	171,803
セグメント利益	66	978	3,335	4,380	4	4,376

(注) 1. セグメント間取引消去であります。

2. セグメント利益は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

2. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

該当事項はありません。

(金融商品関係)

当第2四半期連結貸借対照表計上額と時価との差額及び前連結会計年度に係る連結貸借対照表計上額と時価との差額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(有価証券関係)

前連結会計年度末(平成25年3月31日)

その他有価証券

	取得原価(百万円)	連結貸借対照表計上額 (百万円)	差額(百万円)
(1) 株式	85,265	136,592	51,326
(2) 債券			
国債・地方債等	-	-	-
社債	-	-	-
その他	-	-	-
(3) その他	264	215	48
合計	85,530	136,808	51,277

(注) その他有価証券のうち非上場株式(連結貸借対照表計上額21,664百万円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当第2四半期連結会計期間末(平成25年9月30日)

満期保有目的の債券及びその他有価証券が、企業集団の事業の運営において重要なものとなっており、かつ、前連結会計年度の末日に比べて著しい変動が認められます。

1. 満期保有目的の債券

	四半期連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 国債・地方債等	-	-	-
(2) 社債	-	-	-
(3) その他	9,999	9,999	0
合計	9,999	9,999	0

2. その他有価証券

	取得原価(百万円)	四半期連結貸借対照表 計上額(百万円)	差額(百万円)
(1) 株式	82,203	152,496	70,293
(2) 債券			
国債・地方債等	-	-	-
社債	-	-	-
その他	-	-	-
(3) その他	51,260	51,220	39
合計	133,464	203,717	70,253

(注) その他有価証券のうち非上場株式(四半期連結貸借対照表計上額21,745百万円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

(デリバティブ取引関係)
該当事項はありません。

(1株当たり情報)

1株当たり四半期純利益金額又は1株当たり四半期純損失金額及び算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前第2四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)
1株当たり四半期純利益金額又は1株当たり四半期純損失金額()	39円07銭	18円93銭
(算定上の基礎)		
四半期純利益金額又は四半期純損失金額 ()(百万円)	5,947	2,899
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る四半期純利益金額又は四半期純損失金額()(百万円)	5,947	2,899
普通株式の期中平均株式数(千株)	152,209	153,168

(注) 潜在株式調整後1株当たり四半期純利益金額については、前第2四半期連結累計期間は1株当たり四半期純損失金額であり、潜在株式が存在しないため、また、当第2四半期連結累計期間は潜在株式が存在しないため、記載しておりません。

(重要な後発事象)
該当事項はありません。

2【その他】

平成25年11月7日開催の取締役会において、当期中間配当に関し、次のとおり決議いたしました。

- (イ) 中間配当による配当金の総額・・・・・・・・・・1,299百万円
- (ロ) 1株当たりの金額・・・・・・・・・・8円00銭
- (ハ) 支払請求の効力発生日及び支払開始日・・・・・・・・平成25年12月6日

(注) 平成25年9月30日現在の株主名簿に記載又は記録された株主又は登録株式質権者に対し、支払いを行います。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の四半期レビュー報告書

平成25年11月14日

株式会社東京放送ホールディングス

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 阿部 隆哉 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 牧野 隆一 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 野田 哲章 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている株式会社東京放送ホールディングスの平成25年4月1日から平成26年3月31日までの連結会計年度の第2四半期連結会計期間（平成25年7月1日から平成25年9月30日まで）及び第2四半期連結累計期間（平成25年4月1日から平成25年9月30日まで）に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結貸借対照表、四半期連結損益計算書、四半期連結包括利益計算書、四半期連結キャッシュ・フロー計算書及び注記について四半期レビューを行った。

四半期連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した四半期レビューに基づいて、独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。

四半期レビューにおいては、主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対して実施される質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続が実施される。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。

当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

監査人の結論

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、株式会社東京放送ホールディングス及び連結子会社の平成25年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する第2四半期連結累計期間の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を適正に表示していないと信じさせる事項がすべての重要な点において認められなかった。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は、四半期レビュー報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（四半期報告書提出会社）が別途保管しております。

2. 四半期連結財務諸表の範囲にはXBR Lデータ自体は含まれていません。